

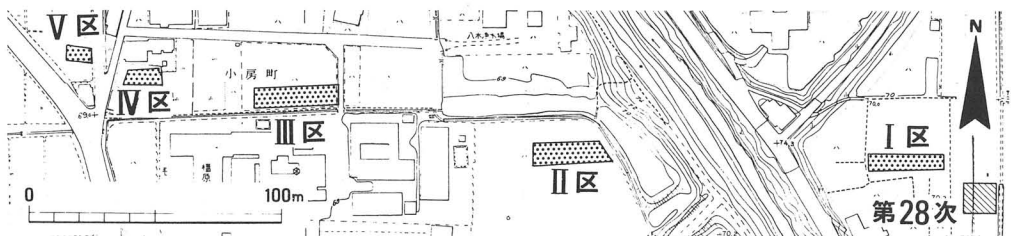
藤原京右京五条四坊の調査（第31次）

（昭和56年1月～昭和56年4月）

この調査は、藤原京内を通る国道165号線バイパスの建設工事に先立って実施したものである。同バイパス関係の調査としては第3年次にあたり、これまでに藤原宮第25・28次調査を実施した（概報10・11）。今年度の工事予定地は、第28次調査区の西端から国道169号線までの東西約350mの範囲で、藤原京の右京五条三坊の北西坪から四坊北部を通り、西京極路（下ッ道）に至る地域にあたる。予定地の中を飛鳥川が東南から西北に流れ、未買収地もあるために、調査区は分断せざるを得ず、東から西へⅠ～Ⅴ区の5区を設定した。調査は西京極路の確認（Ⅳ・Ⅴ区）、および右京の坪内の状況の把握を主な目的としたが、飛鳥川の氾濫による土砂堆積が著しいため、藤原京期の顕著な遺構を検出することはできなかった。Ⅱ～Ⅴ区においては13～14世紀の水田遺構と牛の足跡を検出し、中世におけるこの地域の水田開発と飛鳥川の氾濫の歴史を明らかにすることができた。以下、各調査区ごとに調査の概要を記す。

Ⅰ区 調査区は飛鳥川の東岸の住宅跡地で第28次調査区から西北へ約10m、飛鳥川東岸の堤から東へ約35mに位置する。調査は南北7m、東西30mの調査区を設定して行ない、現地表から3mの深さにまで及んだ。層序は、上から耕土（15cm）、床土（80cm）、砂Ⅰ（30cm、 $a \cdot b \cdot c$ 層に細分できる。以下細分層についてはアルファベットを用いる）、砂礫（40cm、 $a \cdot b$ ）、砂Ⅱ（40cm）、粘土Ⅰ（20cm）、砂Ⅲ（10cm）、粘土Ⅱ（60cm以上、 $a \cdot b$ ）の順である。

遺構は砂Ⅰ - a 層面で、東西溝SD2976、南北溝1条、東南から北西へ斜



第31次調査地位置図（1：3000）

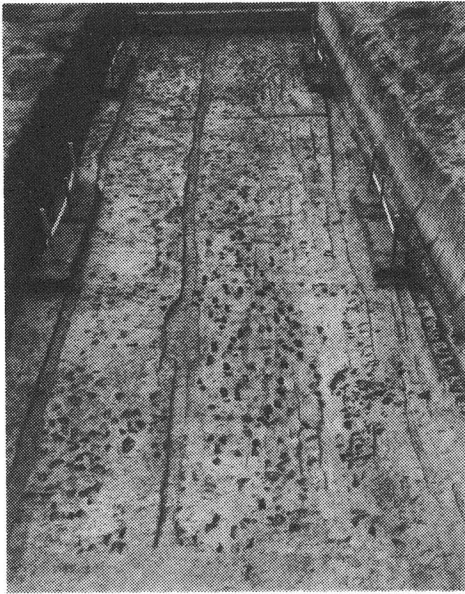
行する溝2条，東南から西へ「く」字形に曲る溝SD 2975を検出したにとどまる。遺物は弥生土器，土師器，須恵器，瓦器，瓦が少量出土したが，多くが水流によって流されたために磨滅していた。砂Ⅰ層以下の砂・砂礫・粘土層は飛鳥川の氾濫による堆積で，砂礫*b*層から12世紀後半～13世紀末の瓦器が出土し，堆積の年代の一端が知られる。SD 2975から13世紀後半，SD 2976から15世紀の土師器の小皿が出土した。

Ⅱ区 榎原市八木浄水場の南に位置し，飛鳥川の西堤から西へ30mの地点である。調査は南北9m，東西32mの調査区を設定して行い，現地表から2.8mの深さにまで及んだ。層序は表土(20cm)，床土(30cm)，砂Ⅰ(50cm，*a*～*c*)，粘土Ⅰ(50cm，*a*～*d*)，砂Ⅱ(10cm)，粘土Ⅱ(25cm)，砂Ⅲ(20cm，*a*～*c*)，粘土Ⅲ(20cm)，礫(20cm以上)の順序で，砂Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ，礫層は飛鳥川の氾濫による堆積である。

遺構は，粘土Ⅰ～*c*層面で南北溝26条，*d*層面で南北溝16条を検出した。これらの南北溝は水田耕作に関係するものとみられ，上層の粘土Ⅰ～*a*・*b*層から13世紀後半～14世紀前半の瓦器・土師器が出土しているので，ほぼその時期の水田遺構とみられる。遺物は弥生土器，11世紀～14世紀前半の須恵器・土師器・瓦器が出土しており，中には水流によって流されたため磨滅したものも含まれている。

この地域では大きく4回の氾濫が確認できる。出土土器によれば，第2回目は12世紀(砂Ⅲ)，第3回目は13世紀(砂Ⅱ)である。その後13世紀後半～14世紀前半にかけての時期に2面の水田面が確認できる。上層の水田は第4回目の氾濫によって埋没しているが，その時期の詳細は明らかにできなかった。

Ⅲ区 小房児童公園の跡地で，Ⅱ区の西北西約80mに位置し，飛鳥川の西堤から西へ約100mの地点である。調査は南北8m，東西43mの調査区を設けて行い，現地表から3mの深さにまで及んだ。層序は客土(30cm)，砂Ⅰ(65cm)，粘土Ⅰ(35cm，*a*・*b*) 砂Ⅱ(90cm，*a*～*d*) 粘土Ⅱ(90cm，*a*～*g*)，砂Ⅲ(25cm，*a*・*b*) 粘土Ⅲ(10cm以上)の順で，砂Ⅰ・Ⅱは氾濫による堆積である。出土土器によれば，粘土Ⅱ層より上層は，13世紀以降の堆積



Ⅲ区全景（東から）

であり、砂Ⅲ層が藤原京期の遺構面とみられる。

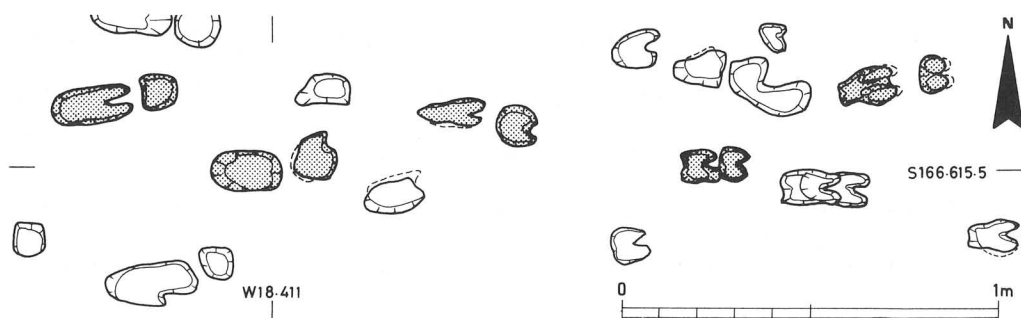
遺構は、粘土Ⅰ層面で掘立柱建物・塀、粘土Ⅱ層の各層に水田に伴う溝・畦畔・牛の足跡などを検出したが、いずれも中世に属するものである。

粘土Ⅰ - *a* 層面では調査区西部にT字状に接続する掘立柱東西塀 S A 2985 と南北塀 S A 2986 を、中央部東寄りに南北棟の掘立柱建物 S B 2987 の北部(梁行3間×桁行2間以上)を検出した。いずれも径30cmほどの円形の柱掘形である。砂

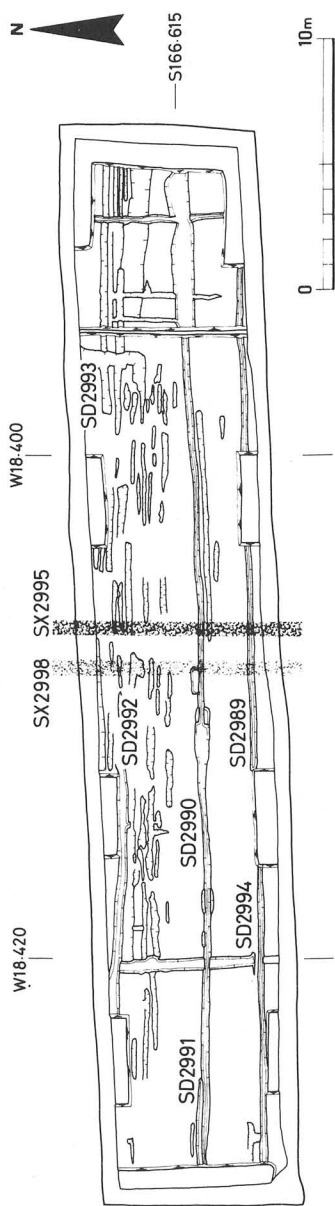
Ⅱ - *a* 層面では幅30~50cmの南北溝42条を検出した。粘土Ⅰ，砂Ⅱ - *a*・*b* 層からは14世紀後半の土師器・瓦器が出土しているので、両層の遺構はほぼ14世紀後半の年代が与えられる。粘土Ⅱ - *a* 層面では水田に伴う畦畔・溝と牛の足跡を検出した。畦畔 S X 2995 は調査区のほぼ中央で検出した南北畦畔で、水田の耕土にあたる *a* 層の上に築かれている。幅60cm，高さ20cmで、中心の一点を国土方眼座標で示すと、 $X = -166,611,100$ m $Y = -18,406,900$ m である。S X 2995 を境にして、東の水田面が西側よりわずかに高くなる。溝は東西溝4条 (S D 2989~2992)，南北溝2条 (S D 2993・2994) を検出した。いずれも幅25~50cm，深さ5~20cmの小溝で、足跡 S X 2997 より新しい。水田耕作に伴う溝と考えられる。このほかに S D 2990 と S D 2991 の間で幅20cm前後，深さ5cm前後の浅い溝状遺構 S X 2996 を多数検出している。東西方向に延び，3~5mの長さで途切れており，犁の耕起の痕跡と考えられる。

足跡 S X 2997 を調査区東南部を除く全面にわたって多数検出した。足跡の中には上層の砂Ⅱ - *d* が充満しており，足跡が印されてから程なくして氾濫によって砂が堆積したため遺存したものである。足跡は平面形によって三類に分けられる。第1類は径10cm程の円形の一端に割れ目が入る形で，底面は割れ目

の方向へ向って深くなる。第2類は2つの半月形が円弧を外にして並ぶ形で、第1類の浅いものと考えられる。第3類は長楕円形（長径15cm，短径10cm）の一端に割れ目が入る形で、底は二段になるものがあり、割れ目のある方が深い。一段のものには前述の割れ目の反対側に浅い割れ目が入る。このほか、平面形が単に円形・長楕円形のものもあるが、これらの中には底面で割れ目の認められるものもあるので、それぞれ第1・3類の変形したものと思われる。深さは深いもので10cmほどである。足跡は一端に割れ目のある点から、牛・鹿・猪・羚羊など偶蹄目のそれで、大きさからみて牛の足跡と判断される。これに関連して現在の農耕用和牛の足跡を調査した結果、次のことが知られた。(1)足跡は底の深い方、割れ目のある方が前方である。第3類の一部のものにみえる浅い割れ目は後の蹄の痕跡である。これによって、牛の歩行の方向が知られ、大部分東西に往復した足跡である。東西方向の溝状遺溝 S X 2996 との関連から、犁耕に使役された牛の足跡と考えられる。畦畔 S X 2995 のすぐ東側では南北方向の足跡が顕著にみられ、畦畔によって水田の変った部分で異なった方向に歩行しているのが注目される。(2)和牛の足跡の調査によれば、同一時の歩行では、前・後脚の足跡が前後に並ぶセットとなり、そのセットがジグザグの形に配置され、二本の脚の左右の距離が15~20cm，同一脚の前後の距離が並足なら130cm前後であることが知られた。無数にある足跡に、この配置のパターンをあてはめ、同一時の歩行の足跡を抽出することができた（下図。網目をかけたものが同一時歩行の足跡）また、これによって、第3類が後脚の足跡であることも明らかになった。



牛の足跡図（Ⅲ区）



Ⅲ区遺構配置図(1:300)

り返す不安定な地域であったことが判明した。

Ⅳ区 檀原市消防署の北で、Ⅲ区の西40mに位置する。下ッ道に推定される国道169号線に東接する地域である。調査は、南北7m、北辺13m、南辺16mの台形の調査区を設定し、3mの深さに及んだ。層序は、調査区中央で検出

粘土Ⅱ-c層以下については主に土層観察によらざるを得なかった。c層面では足跡SX3000と溝、d層面では溝、e層面では畦畔SX2998と溝とを確認した。いずれも水田に関わる遺構と考えられる。e層の畦畔SX2998は南北方向で、東辺が上層の溝でこわされており、幅60cm以上、高さ30cm。想定中心線の一点を国土方眼座標で示すと、 $X = -166,615,100\text{m}$ 、 $Y = -18,408,400\text{m}$ で、SX2995の西1.5mに位置する。粘土Ⅱ層の各層からは11～13世紀の土師器・須恵器・瓦器が出土し、上層の砂Ⅱ層から14世紀後半期の遺物が出土しているから13世紀～14世紀後半の間に、4面の水田が確認できる。足跡SX2997は14世紀後半期に考えることができる。

砂Ⅲ層面は現地表下2.4mにあり、飛鳥Ⅲ～Ⅴ期の土師器・須恵器が出土しているため、藤原京の時期の遺構面である。南北溝4条のほかは顕著な遺構は検出できなかった。遺物としては上記のものほか、弥生土器、磨耗した豊浦寺式単弁八弁蓮華文軒丸瓦1点が出土している。

以上のように、この地域では、少なくとも13世紀から14世紀後半にかけての4時期の水田面が確認できた(粘土Ⅱ)。そして、14世紀後半には飛鳥川の氾濫を受け、その後、何度か水田化と氾濫をくり

した南北畦畔 S X 3010 を境に東・西で一部異なるが、東半でみると耕土（20 cm）、床土（20 cm）、砂 I（70 cm, $a \sim e$ ）、粘土 I（30 cm, $a \sim d$ ）、粘土 II（90 cm, $a \sim h$ ）、砂 III（20 cm）、粘土 III（60 cm 以上, $a \cdot b$ ）の順で、砂 I は氾濫による堆積層である。

遺構は、粘土 I - a 、粘土 II - a 、砂 III 層の各層の上面で、溝、畦畔、足跡を検出した。砂 III 層より上の層は 10 世紀以降の堆積層で、藤原京の遺構面は確認できなかった。

粘土 I - a 層面では水田に伴う畦畔 S X 3031 と足跡 S X 3011・3012 を検出した。S X 3010 は南北方向の畦畔で、東の水田耕土の粘土 I - a 層と同じ粘土からなり、幅 120 cm、高さ 10 cm であり、中心の一点を国土方眼座標で示すと、 $X = -166,611,800\text{m}$ 、 $Y = -18,464,000\text{m}$ である。S X 3010 の西の水田面は東より 20 cm 低く、粘土 I 層はみられない。その代りに砂質粘土 - $a \sim c$ の三層が堆積し、砂質粘土 - c が西の水田の耕土であり、これが東の水田耕土の粘土 I - a 層に対応する。東・西の水田耕土面で検出した足跡 S X 3011・3012 は、III 区の足跡に比べて平面形が明確でないものが多く、配置も乱雑であるが、牛のものとみられる。粘土 II - a 層面でも足跡 S X 3013 を確認した。足跡 S X 3011 から 14 世紀後半の土師器、粘土 II - a 層から 13 世紀後半～14 世紀初の瓦器が出土しているので、粘土 I - a 層の水田は 14 世紀後半、粘土 II - a 層の足跡は 14 世紀初め頃の時期のものと考えられる。

粘土 III - a 層面では 4 条の南北溝 S D 3014～3017 を検出した。東から幅を記すと、S D 3014 が 2.8 m 以上、S D 3015 が 3.4 m、S D 3016 が 2.8 m、S D 3017 が 2 m 以上であるが、湧水が激しかったため、各溝とも底までは確認できなかった。S D 3014 から 10 世紀の土師器・須恵器が出土した。

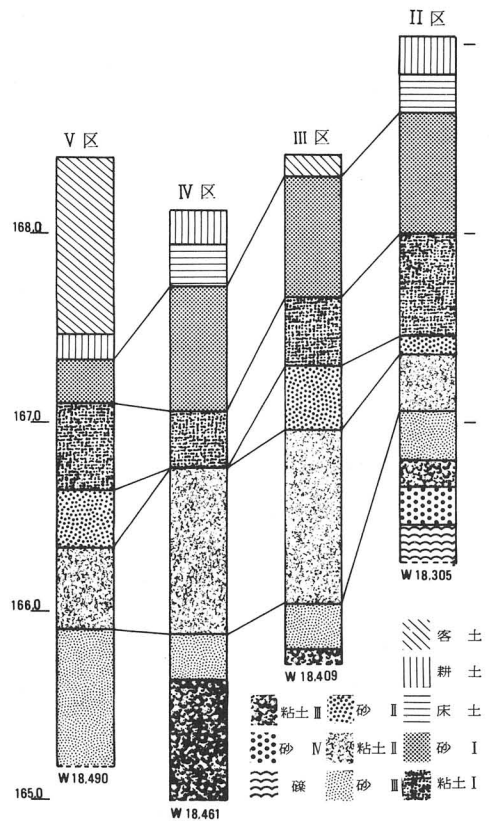
V 区 国道 169 号線に西接する住宅跡地で、IV 区の西北 15 m に位置する。南北 6 m、東西 12 m の調査区を設定したが、階段掘りにしたため、実際に平面的に遺構検出できたのは、南北 3 m、東西 8 m の小範囲である。層序は上から客土（90 cm）、耕土（15 cm）、砂 I（20 cm）、粘土 I（50 cm, $a \sim c$ ）、砂 II（30 cm, $a \sim c$ ）、粘土 II（40 cm, $a \sim c$ ）、砂 III（70 cm 以上, $a \cdot b$ ）の順

で、砂Ⅰ・Ⅱは氾濫による堆積である。

遺構は砂Ⅱ-a層，粘土Ⅱ-a層で南北方向の牛の足跡，粘土Ⅱ-c層面で牛の足跡と土壌，砂Ⅲ-a層面で南北溝3条を検出した。遺物は須恵器・土師器・瓦器が出土し，年代の明らかなものとしては，粘土Ⅱ-b層出土の13世紀後半～14世紀初めの瓦器がある。

まとめ 今回の調査地は全域にわたって，飛鳥川の氾濫による堆積層が厚く認められたため，各区で3 m前後の深さまで調査したにもかかわらず，下ッ道や右京の坪内状況の把握という所期の目的を達することができなかった。しかし，Ⅱ～Ⅴ区においては，13～14世紀の水田化の実態と飛鳥川の氾濫状況を明らかにすることができた。Ⅱ～Ⅴ区についてまとめておく。

Ⅱ～Ⅴ区の層序は，下図のような対応関係が想定できる。すなわち各区の砂Ⅰ，粘土Ⅰ，砂Ⅱ，粘土Ⅱ層が各々対応する。砂Ⅲ層については，各区の出土土器の年代に隔たりがあるので，同一層位とはいえない。この層序の対応関係から，飛鳥川西岸のこの地域の変遷史の一部は次のように考えることができる。Ⅲ区では藤原京期に南北溝が掘られ，Ⅳ区では10世紀ごろ南北溝4条が作られる。これらの溝の性格を解明するためには周辺地域の発掘をまたねばならないが，水田に伴うものではないだろう。飛鳥川に近いⅡ区では，再三氾濫をこうむっており，砂礫層が層をなして厚く堆積している。今回の調査で時期を確認した中では，12世紀の砂Ⅲ層が最古の堆積層である。13世紀から14世紀初にかけて，各区に広がる粘土Ⅱ層を水田土壌として水田が作られる。Ⅱ～Ⅴ区では畦畔・溝を検出し，



層序対応図

Ⅲ～Ⅴ区では牛の足跡を確認することができた。特にⅢ区では、足跡とともに犁の痕跡と推定される溝状遺構を検出し、犁耕に伴う牛の足跡であることが明らかになった。14世紀後半には、飛鳥川の大きな氾濫によって、砂Ⅱ層が堆積して水田面がおおわれる。Ⅳ区では砂Ⅱ層がみえないが、粘土Ⅱ-a層面の足跡S X 3013内に堆積する砂がそれに対応する。また、14世紀後半には粘土Ⅰ層が堆積し、Ⅳ区の畦畔S X 3010からも、再び水田化がなされたことが知られる。Ⅲ区では小規模な掘立柱建物S B 2987、塀S A 2985・2986が作られる。その後再び氾濫によって砂Ⅰ層が堆積する。以上のように、13世紀～14世紀において、水田化と飛鳥川の氾濫による水田の埋没を繰り返している。氾濫による砂の堆積は、現河道から西へ約200 mにまで及んでいる。平安時代以降に「淵瀬常なき飛鳥川」と詠まれた飛鳥川の実態の一端が明らかになり、また氾濫に抗して水田経営に務めた中世農民の営為がここには示されている。

S X 3010は想定下ッ道のすぐ東に位置する南北畦畔で、その西側は一段低い水田となっている。この畦畔は、藤原宮大極殿跡北方で検出した朱雀大路と四条条間路交点の中心から4坊分を計って求めた推定下ッ道の中心線（データは下記参照）から東へ26 mの位置にある。S X 3010は14世紀後半の遺構であるが、前代の下ッ道と関係ある地割線を示すものとみると、下ッ道の幅は52 mに復原できる。下ッ道幅はこれまでの平城京内での調査によれば、側溝心々距離で23 m（奈良国立文化財研究所『平城京朱雀大路発掘調査報告』『平城宮発掘調査報告Ⅸ』）、現地表の遺存条里地割の計測によれば約50 mの数値を得ており、ここでの数値は後者に近い点が注目される。なおⅢ区で検出した南北畦畔S X 2995とS X 2998とは、それぞれS X 3010の東57.1 m、55.6 mに位置する。その距離は大和の遺存条里地割の1町の計測値＝約109 m（年報1975）の半分に近似することからS X 2995・2998は条里の坪を東西に2等分する畦畔である可能性がある。

※ $\left\{ \begin{array}{l} \text{朱雀大路・四条条間路交叉点中心 } X = -166,611,100 \text{ m } Y = -18,406,900 \text{ m} \\ \text{藤原宮中軸線の振れ } \quad N 0^{\circ} 26' 30'' W \\ \text{朱雀大路中心線から下ッ道中心線までの4坊分 } \quad 266.4 \text{ m} \times 4 = 1,065.6 \text{ m} \end{array} \right.$